

若越郷土研究

53 の 2

グリフィスの日本昔話

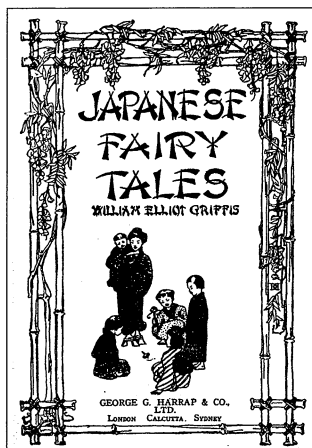
山下英一

(一)

「若越郷土研究51—1」に掲載の拙文「グリフィスの福井民話」を再考するつもりで全体に曖昧な論点を整理し、できるだけ資料を増やし、論旨が明確になるようにつとめた。

分かりにくい最たるものはおそらく妖精ものがたり、または妖精はなしという場合の妖精が一般になじめないことばに聞こえることである。妖精のもとになることばは英語の Fairy (フェアリー) であろう。それが日本に入ってきたときそれに相当する日本語を見つけてけることは、定めし困難であったと思われる。今ここでウェールズの民話という一九一一年出版の英書のなかにある Fairy の解説を

読んでみる。フェアリーの住処は森、湖、谷といった自然と超自然の境にある。あまりに善良なのでキリスト教徒でなくても地獄に堕ちない。不死である。小さくてかわいい人の形をしているがその姿は見えない。人間にやさしいが邪険にされると復讐する。月夜に輪になって踊り鶏が時を告げるや消えるといわれるが、人間の若者が美しいフェアリーに惚れて結婚することになるが、そのとき娘が男に守ってほしいことを約束させる。守らないうと分かれれば妖精はたちまち消え去る。といったようなことが書いてある。しかしその当時すでに Fairy は過去のものになっていて、新しい妖精はなしの採集もなくなったという。



次に妖精に詳しい日本人研究者の説によると妖精を自然の精霊とみなし本来は形がないものだから想像すればよいというが、それは妖精を持たない日本人としては妖精の伝統を無視していいことにならないであろうか。むしろこの問題は外国人研究者の立場から見るほうが論じやすいようである。ミットフォードは著書 *Tales of Old Japan* (1871) のなかに *Fairy Tales* の項目を入れ、「舌きり雀」「文福茶釜」「かちかち山」「花さか爺」「さるかに合戦」「桃太郎」「狐の嫁入り」「坂田金時」「こぶとり爺さん」(これらの題名の英語訳は割愛する) のどれもよく知られた日本の昔話を挙げている。ほかの項目は「四十七士」のような復讐もの、冒険もの、迷信、説教などである。つまりわれわれからすれば昔話なのである。

昔話についていえることは話しに発端があり経過がありそして結末というようにまとまりがある。それが根本的構造をなしていて、口承の過程でそこに創意が加わってさまざまに変化した話となっていまに伝わっている。これが昔話についての大方の見方であろう。ミットフォードは日本語の習得に苦勞した学

句に日本昔話の収集にはいった。福井から家族宛のグリフィスの手紙によると「Tales of Old Japan」の注文を頼んでいる。しかし翌年東京の大学南校教頭フルベッキの家でそれを読んだので注文を取り消したことがあった。

六月はじめ福井郊外の乗馬による散歩の印象をその手紙文から引き写してみよう。「田舎はおだやかで精気に満ち緑一色に包まれていた。田植えの稲は若いうちが美しい。この泥の中を水の下での作業はほとんど大人と子供の女がする。山じゅうがくすんだ明るい緑になる。妖精の国のように美しい。城と歴史的名声に相應しい。実際、山の多くが伝承と物語の生息地である」。文中の「妖精の国のように美しい」は原文が「beautiful as fairy land」となっているところから穿鑿すれば、¹⁾ fairy を妖精に置き換えてはたして何が分るか。由々しい問題になってくる。しかし「ここでは美しい自然、古き昔から続く女たちの労働、城や山に思う過去の戦場の址などが醸すイメージを全部ふくめて妖精の国と呼ぶならそれでいいではないか。

グリフィスの生涯を見ると作家として3つ

の顔を有していて、その最初は日本の歴史を物がたりふうに記し、2番目は伝記という人物評価、もう1つが寓話的読み物であった。

この3番目にあたる読物、言ってみれば日本に関する妖精ものの突然の出現といつてもよいこれには前兆ともいえるものがあつた。九月の福井日記に「日本について子供の読む本の構想がまとまつた」(Boy's book on Japan, look definite shape)と記してあつた。それが長い目で見れば功を奏して、3冊の日本昔話集になりえたといふことも多い。

- ① Japanese Fairy World: Stories from the Wonder-lore of Japan 1880(明治13) 35編 pp.304 James H. Barhyre, Schenectady, N. Y.
- ② The Fire-Fly's Lovers and Other Fairy Tales of Old Japan 1908(明治41) 20編 pp.166 Thomas Y. Crowell & Co. Ltd. London
- ③ Japanese Fairy Tales 1923(大正12) 28編 pp.219 George G. Harrap & Co. Ltd. London

実は②が寓話的読み物群の走りとなった。以後③までの15年のあいだに6種の Fairy tales が書かれていたと思われる。次の式で明らかにようにグリフィスが作つたり集めたりした日本昔話は総計45編になる。

$$\textcircled{2} \parallel \textcircled{1} - 18 + 3 \text{ (新)} \textcircled{3} \parallel \textcircled{1} - 17 + 3 \text{ (新)} + 7 \text{ (新)} \quad \textcircled{1} + 10 \text{ (新)} + \textcircled{3} \text{ (新)} = 45$$

次に6種の fairy tales を発行年順に列挙する。出版社はすべて Thomas Y. Crowell Company, N. Y. である。

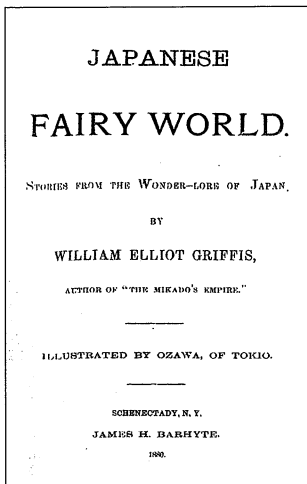
- The Unmannerly Tiger and Other Korean Tales (朝鮮) 1911 19編
- Dutch Fairy Tales for Young Folks (和蘭) 1918 21編
- Belgian Fairy Tales (白耳義) 1919 26編
- Swiss Fairy Tales (瑞西) 1920 24編
- Welsh Fairy Tales (威耳斯) 1921 24編
- Korean Fairy Tales (朝鮮) 1922(未見)
- このうち(和蘭、オランダ)と(瑞西、スイス)については前回の「グリフィスの福井民話」で紹介したので今回は(朝鮮)(白耳義、ベルギー)と(威耳斯、ウェールズ)の fairy

tales (昔話) について紹介したい。「斑の子馬にまたがり灯を握り持ち二本脚で立つ羽根の生えた虎、千年の進化の果てに飛行できる蛇など、この国の人が信じてきた最古の生物と共に、敵をやつける山の霊を朝鮮の国旗に見た。その象徴的妖精が大門を開けてわたしを朝鮮の人の心に通じさせてくれた」(序)。

このことがあって以来グリフィスは朝鮮の妖精との心の通じ合い (mental recreation) を楽しんできたと述べる。福井にいたときのことだが、潮の流れに乗って越前の海岸にたどり着き上陸してきた朝鮮人について残された話から、朝鮮民族は柔和で平和を好み外敵の侵入を挑発する行為など微塵もない。しかし日本人の中に朝鮮を日本の一部に隷属するものと思っている。これはその著 *The Mikado's Empire* (1876) のなかで述べている。因みにグリフィスには *Corea: The Hermit Nation* (1882) といつて、第九版 (1911) まで版を重ねた浩瀚な著書があり、またキリスト教受容の厳しいこの国で布教中に亡くなった米人宣教師アパンゼラー (Henry Gerhard Appenzeller 1858-1912) の伝記 *A Modern Pioneer in*

Korea (1912) がある。

グリフィスはラトガース・カレッジを卒業した一八六九年の七月、長姉マーガレットと三ヶ月のヨーロッパの旅に出た。晩年の妖精物語の舞台になった国々を訪れていた。ベルギー南部のワロン地方は仏語を話し武勇と勤勉の伝統、芸術と建築の驚異、妖精や英雄の物語に満ちた場所である。オランダ人よりも早い、一六二四年にワロンから来てニューヨーク、ニュージャージーに住み着いた。グリフィスはベルギーを訪ねるたびに就寝時の話の園に咲く花の種を持ち帰っていた。妖精物語は第一次世界大戦後の出版であるがいかにも自由を守る国であることを証明する歴史物語がある。一九一四年八月二日、独逸軍が仏蘭西へ行くのにベルギーを通りたいと最後の



通牒を送ってきたとき、国王アルバートと女王マーガレットはこれを断固として退けたという勇気と独立の精神に打たれる話があった。

グリフィスの母方の先祖は十八世紀末にフィラデルフィアに定住したスイス移民であった。そのスイスの昔話をグリフィスは大叔母のハンナ (Hannah 1787-1866) や大叔母のサラ (Sarah 1791?-1868) から幼いときに聞いて憶えた。一方、祖父はキャップテン・ジョンと呼ばれる船乗りで、大英帝国の南西地方ウェルズの出身であったが一七八三年に渡米した。24編中の最終章 *The Sword of Avallon* を取り上げてみよう。アバロンとはケルト伝説に出るアーサー王とその部下が死後運ばれたという西方楽土の島のこと。(研究社新英和大辞典二〇〇二年) ①サクソン人やノルマン人や20世紀のチュウトン (ドイツ) 人でさえウェルズ征服はかなわなかったのは小さな国だが軍事力でも物資でもなく魂が世界最大の国の一つであった。その魂は侵略者を相手に戦ったばかりか数万の避難民を自分らの家に招いて食事を与えて保護し

た。②復興は目覚ましかった。兵士の力や武器とか戦争によるわけではなくて—ウエルズ人は義務や敵から身を引くようなことは断じてないけれども—想像力を働かし魂の高貴な行為に灯をともし詩人、歌人そして作家の力によってこういう結果が生じたと思いたい。

③万人教育が広がりウエルズ語は再び死者から起ち上がった。大都市カーディフに建つウエルズの純白の大理石像十二偉人は歴史のなかでもっともスリリングな出来事の解明を図らんとする。④圧迫された国民のために自由と文明の救出の「のろし」をかかげよ、と結ぶ。

それにしても *Fairy Tales* の執筆という不思議とも言える現象の起こったのは何か原因があるのだろうか。またあえて言えばなぜ小国ばかりでこれにもわけがあるのだろうか。このように妖精物語がまとめて書かれるには、日露戦に国力を発揮して戦勝した日本が、これに乗じて軍事力行使の懸念が見られる場合グリフィスの問うべき平和的方法の一つが生きた話で真実を伝えることであった。話を文章化したのが *Fairy Tales* でありその話が想

像力を発揮して譬え話になれば *Fairy Tales* であろう。ところがすでに述べたようにほかの理由があった。つまり先祖の生地であり、恩義のある国であり、興味のある国であり、それらの国に感謝や同情を捧げる行為として *Fairy Tales* があつたとも考えられる。

オランダがグリフィスのもうひとつ知るべき大国になる。米国の歴史家 John L. Motley (1814~1877) の大著 *The Rise of Dutch Republic* (1856) を短縮して一九〇〇年ボストンへ *The Siege of Leyden* を出版する。「これはオランダ国民だけの話でなく世界の自由についての歴史物語である。ライデンほど米国の歴史に密接な都市はない」と序文に言う。植民地米国の原点を追求した作品である。一六一〇年、迫害を逃れて英国からライデンに來た清教徒の家族があつた。その地に伝わる勇敢な話を聞いて育つた子供たちが一六二〇年メイフラワー号で新大陸に渡るとマサセチューセッツを発見しニュージーランド建設の立役者となつた。独立戦争でライデンが米國に示した同情によって、一七八〇年オランダと米國の二つの共和国の間で同盟が結ばれ

た。一八九九年、26カ國が参加して第一回平和會議がハーグで開催された。Verbeek of Japan; A Citizen of No Country, A life Story of Foundation Work Inaugurated by Guido Fridolin Verbeek (1900) は日本における西洋文化導入の基礎になる人材を招致したオランダ人フルベッキの伝記である。著者のグリフィスはオランダ改革派教会に所属していた。

南北戦争後の米國社会は世俗化が進み、変わったもの (*strange*) への興味が高まり20世紀にはこうと文学者が *Fairy Tales* を書く。人間であるゆえにもつあらゆる意識的感慨を包含したイロニーや諧謔まじりの表現様式が生れる。それが妖精的なのである。自然の共有とあいまって人間と妖精の関係が生れると、人間にとって変わった出来事が記憶される。平常なところになにか抗しがたいことがらが発生すると、人は表現が容易、虚偽を纏い、書きたいように書ける近代的民話の世界に逃げ込もうとする。そこにも今日のいわゆる昔話の発生があると思いたい。

先にミットフォードが日本の fairy tales に 9つの昔話を取り上げていると書いたがそのうち5つがグリフィスの Japanese Fairy World にはいつている。

ミットフォード・グリフィス

舌きり雀

The Tongue-cut Sparrow 上に同じ

文福茶釜

The Accomplished and Lucky Tea-Kettle

The Wonderful Tea-Kettle

さるかに合戦

The Battle of the Ape and the Crab 上に同じ

桃太郎

The Adventures of Little Peaching

Peach-Prince and the Treasure Island

坂田金時

The History of Sakata Kinoki

Kinano, the Wild Baby

このうち金太郎の話について考えてみたい。それにはわけがあつて日本昔話①②③のなかで①の5編のうち②③へ三編が取り上げられ二編が①に残つた。ところがその一編の金太

山下 グリフィスの日本昔話

郎が③に現われるところからこの話に注目した。一九〇〇(明治33)年の幼年唱歌「キンタロウ」という歌がたいへんに流行した。「クマニマタガリ、オウマノケイコ」と筆者の幼年時代にはこれは元氣の出る子供の歌であつた。ミットフォードの読みは以下のようなうだ。

勇気も武術にも長け天皇の護衛を預かる身分の若者は都に惚れた娘がいた。ところが嫉みにあい濡れ衣を着せられるや浪人の身に墮ちて行方知れずになる。そこで娘は男を捜しに放浪の旅に出る。幸い二人は再会するが男は死別する。女は足柄山に入り男子を誕生。その子の不思議な力に驚いた樵は山姥に預けることにした。やがてその子は大杉を揺さぶつて天狗の巣をおとすほどの怪物になる。狩に來た源頼光は少年の離れ業を見るやこれまでの苦難を語つて聞かす山姥こそその子の母親であることを知り、すぐにも家來に乞われるや金時に名を改めて武勲を立て有名になつた。

これにたいしてグリフィスの話はこうだ。足柄山に金太郎という名の野生の子が住んでいて、野生の動物が遊び仲間の森の王子であつた。

つた。父母のこと樵のことはミットフォードに倣つたことにして金太郎の家來に天狗がいて時に逆らい時に言うことを聞かぬときがあつた。婆さん天狗がずんぐり野郎の金太郎のうままになるものかとあざ笑つたので木を揺さぶつてその巣を落としたことがあつた。たまたま源頼光の一行が京都に上る途中でその奇怪な男の子を見て養子にする。勇敢な家來に成長し名前も坂田金時になつた。

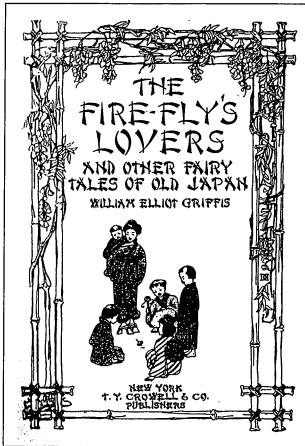
2つの話を比べると「金時」の場合不幸な境遇のもとに生育し強くなつて源頼光に認められる出世話である。一方、野生の子「金太郎」は森に住みクマ、ウサギ、イノシシ、リス、テン、キジ、タカを友として子供が怖がる高慢ちきな天狗を木から落すなどの勇氣ある行為者である。話に夢のような面があつて妖精話に近い条件を備えているといえる。どちらの話にも頼光と金時ら四天王の大江山の盗賊酒呑童子退治のことは出ない (Kinano, the Wild Babyの後に Raiko and the Shi Ten Doji が入る) が日本の子供の英雄的人物になつて後世に伝わっている。子供の胤に「マサカリカツイデ ケダモノアツメテ」木の上

の巢から落ちたが折れなかつた鼻をこすつて
いる天狗の子達の絵が描いてある。このユー
モラスな表現でグリフィスの話は終わつてい
る。

ところがここで終わったと思うと著者の裏
切りにあつて、知らないで大恥を掻くことにな
る。③のキンタローは①と違つて題が *The
Boy Brought Up in the Woods* に変わつていて
一口で言うると実に面白くしている。目立つと
ころを要約すると、(イ)時代背景に源平の
合戦が入る(ロ)頼光は森に怪力少年の話を
聞き樵に扮して入る(ハ)子供が熊を投げ倒
す。猿も大勢の天狗もいる(ニ)鹿の審判で
ウサギとサル格闘技と食事(ホ)森の小屋
で頼光と源氏の一族キンタロー母子の対面
(ヘ)頼光とキンタローの相撲は引き分け
(ト)母や仲間との別れ(チ)母を京都と呼
び、結婚、息子と娘、偉大な英雄。これは余
談であるが歌舞伎の荒事の起源は金平浄瑠璃
であるという説があるそうで、主人公の金平
は坂田金時の息子と考えられるというから父
の敵を打つて偉くなり母に孝行できた金太郎
の名前は文芸のなかでもいろんなバリエーシ

ョンを生んだのである。

日本昔話の英文による海外紹介を異文化交
流の一端と考へてその最初の明治初期のころ
に返つてグリフィスのテクストを中心に他の
テクストを比較の対象とした。そこでミット
フォードを取り上げたが、次はファウンダ
(*Captain E. Proudes*) である。グリフィスの
知るところではファウンダは当時在日14年の
日本の英国領事館で警備員であつて流暢な日
本語を話す。著書に FU-SO MIMI BUKURO
扶桑耳袋(1875) Printed and Published at the "Ja
pan Mail" Office, Yokohama, Japan がある。こ
れは *The Japan Weekly Mail* の1874/10/12号、
1875/9/11号に連載された。目次は「迷信」
で始まり「神話伝説」で終わるまでその間に
世帯一般のことが28項目に分かれて説明され



ている。伝説 *legendary* にあるキンタローの
話はこうである。「相模の森へ狩にでかけた
源頼光は足柄山の寂しいところで、仲のよさ
そうな数匹の野生の動物に囲まれて小熊と相
撲を取る少年を見つける。案内されていつて
美人の面影を残す山姥がその子の母と分つた
ので頼んで少年を養子にもらう。のちに坂田
金時の名前の武士になり酒呑童子退治で名声
を博す」。同じ内容の昔話を *fairy tales* と取る
か *legend* と取るかは話の中心に天狗退治を
置くか盗賊退治を置くかの違いで分けられる
ように思われる。昔話は口承に始まりそれが
文芸にまとまるには話に発端と経過と結末が
備わらねばならないと童話作家の関敬吾が言
っているがその点で英語による「金太郎」は
グリフィスの話が光つていた。

一八七六年発刊のグリフィスの *The Mi
kado's Empire* に寄せる多数の評論のなかに
その本はハサミと糊とで作つたといわんばか
りに盗用の嫌疑をかけた投書があり、その記
事はグリフィスを不機嫌にした。しかし潔く
謝辞を表し「扶桑耳袋」をして知識を詰めた
貴重な宝庫であると賛辞を送った。確かにグ

リフィスが越前の国の武生近在で見た「流れ勸請」、鯖江で見た「丑の刻参り」の風習の痕をファウンダの記述には前者は産褥の女が死ぬと血の池に落ちて苦しむが、水で四方に広げた布切れがゆるむと霊が清められて煉獄の絆が解けてより高い輪廻につく話。また後者は愛する男に捨てられた女が嫉妬にもえて復讐するという話で、いずれの風習も明記してある。しかしグリフィスはこれらを参考にしても盗用はないだろう。足柄山の金太郎に妖精のイメージが濃いとみてこの話を再認識した著者がどうして伝説的話に与することができよう。

一連のグリフィスの fairy tales には様々な生き物が登場してくるが、なかでも「竜」がでる作品が15編と多く全作品45編の1/3を占めていた。その中の6編が一八七一年三月〜一八七二年一月にかけ福井に滞在している人々の暮らしから連想される話である。「竜」について考えるために The Child of the Thunder を読んでみる。「遠くに白山を望む越前の山に、貧しくもつましい働きの老夫婦が住んでいた。子供好きで養子に後を継が

山下 グリフィスの日本昔話

せたくも貧しいので、暮らし向きがよくなり土地も増えたときのことにした。小さい谷間に耕作の土地を持つていただけであった。長年かかって石でダムを作りそこに山の土や下の谷から土を運び入れて小さな稲田ができた。20年の労苦のあとに棚田3段ができたが夏の旱魃に収穫の半額税はつらかった。ある夏の早のため田の稲が赤くなってきたとき稲光、山にこだまする雷鳴とさわやかな驟雨。

人間を殺す雷神の話を知っていたが、避難せずに仕事を続けるほど雨がうれしかった。恐ろしい光に目がくらみ耳を聳する音がして目の前に落雷。無事を仏に感謝し、見ると足元に元気にはしゃぐ男の子がいて連れて帰る。

雷神の贈り物だから雷太郎と名づけて養子にした。親の言うことを聞く優しい子に成長する。太神楽が来てもほかの子のように行かず、岩に登り鳥の飛ぶのや川の流れを見つめた。百姓の暮らし向きがずいぶんと好くなってきた。「貧乏」の名前を「金持ち」に変更した。18歳になったささやかな祝いの席で、雷太郎が嵐のなかで雷から生れたと聞かされた。すると改まって老夫婦に感謝と別れ

を告げるや小さな白竜になって飛び出した。見る間に大きくたくましくなって現われると、銀の城のような人道雲に消えていった。裕福な暮らしのうちに死んだ老夫婦は村の火葬場の炉で白骨になり、遺灰は一つの骨壺に入れて寺の墓地に埋葬された。苔むした墓には白竜が彫られてあつて今もこの小さい村の古い墓石の一つになっている」。

もし誕生の日に落雷から生れたことを知らされなかつたら雷太郎のことは誰にも知らずに人間のままで終わったであろう。しかしこういう情報は誰かが口にするものかもしれない。この話は守るべき約束事が破れて運命が逆転する fairy tales の定番を日本の話に引用したと考えられる。昔話に竜の存在は大きくもともと中国から輸入されたイメージであるが、雷神の住む空にいる竜は白い。仏陀に感謝の祈りといった福井体験から感じ取った日本人の精神の拠りどころを見つめた美しい昔話である。

(三)

グリフィスの福井民話(昔話)六編に Lord Cuttle-Fish's Concert (イカ脚の音楽会)とい

うまったく独創的一編があり、これが昔話の種類の数でも目立つと思われる「猿の肝と母」を母体に行っていることが分った。この話の1つ前にHow the Jelly-Fish Lost its Shell (クラゲが殻を失った訳) という話がありこの竜宮のお后が病気で猿の肝がいいと聞いて亀にその用事を言い付けるのだが、そこに医者とは名ばかりのイカがいて病気のもとになる毒を吸盤で吸い出す使用を申し出たがだめだった。

「肝取り」の話には犠牲者が生じるのが味噌で標準の話では竜宮の使いのかめがサルの子を肝を取りに行ったのはよかつたがくらげが告げ口をしてその罰に骨を抜かれる。

イ、猿の生きも ロ、くらげ骨なし

ハ、さるの生き肝 ニ、The liver of

a monkey

	病気	使い	つげ口	場所
イ	神様の1人娘	犬	蛸、針河豚	鹿児島県大島郡
ロ	王様のおきき	かめ	くらげ	りゅう宮
ハ	難産の龍の雌	龍の雄	龍の雄	九頭竜川
ニ	the Queen (お后)	the tortoise (かめ)	the jelly-fish (くらげ)	Riu Gu (龍宮)

出典

(イ)「日本の昔ばなし」(Ⅲ)関 敬吾編

1957 岩波文庫

(ロ)「鶴の恩がえし」 坪田讓治

1952 新潮文庫

(ハ)「越前の民話」 杉原丈夫

1966 福井県郷土誌懇談会

(ニ) Japanese Fairy World W. E. Griffiths

1880 Schenectady, N. Y.

猿は知恵のある動物に例えられ三猿の戒めというところの短所に目をつぶり、人の非行に耳を貸さない、人の間違いを言いふらさない、これら三態を両手で目を、耳を、口を押さえる仕事で表わすのが普通である。実はとらわれの身であつてまったく疑つても見ない猿に、竜宮のくらげが命がけの告げ口をしたのには、お調子者の猿の動作と勘違いをあまり立派とはとても思えなくてつい三猿の戒めを破ってしまったのだらうと、くらげに憐憫の情がわく。

お后に仕えて堂々としていたくらげが、その善意から生じた裏切り行為のためにお后の信任を失つて甲羅を剥がれる罰を受けて姿を

消した。あとには告げ口や (tell tale) の汚名がのこるばかりであつた。人を助けようと思つてしたことが別の人への罪を犯す行為になる二個の命題による二律背反がこうして巢食う。したがつて(ロ)と(ニ)は「猿の生きも」と「くらげ骨なし」が無理なく一つの話にまとまつたものとして面白い。坪田讓治は柳田國男の「日本昔話」から話を採用したと書くようにもとの構成により近いと思われるが、グリフィスの話もこれと似ているところから正統なものといえよう。その点(イ)(ハ)は採集地も明記されて独自の話が生れていた。病人が竜王、猿を連れてくるのも肝のことを話すのもくらげで骨抜きにされる。かめが使者になる話をグリフィスは知つていて猿がかめの甲羅を剥がしたのは肝の医学的知識が猿にあつたことを物語る。しかしただけな話なので②③で削られた。「猿の肝とり」の話は本来インドの話が中国、朝鮮、日本へと伝播した中の一つであるとされる。

昔話の種類の一つである動物譚に現われる動物にイカがある。先の骨なしくらげに藪医者で登場しているがこれがイカの音楽会の伏

線になつていた。すなわちお後の病気が重くなり陽気なイカは大鼓とギターの演奏を止めて巢に閉じこもつてしまふ。ここからはグリフィスの創意であろうと思われる話が展開する。グリフィスの六編の福井民話は日本のテクストになく「イカ卿の音楽会」はそのうちの一編で大名の城内のコミック（滑稽な）な生活面を暗示していると、著者の弁が②のはしがきにある。とはいつてもこの1つ前の骨なしくらげと同じ竜宮内に起こる話として読むように作られている。過去の話の建て前として寓話的要素が多分に見られるがそれらに相当する大道具や小道具の類、大きな祝いの行事にまつわる習慣などで在りし日の城内の様子（ドラマチック（誇張して）に表現されればさぞかし面白い読み物になるであろう。一読して、グリフィス書簡に何か参考になることはないかと思つて調べたがそれが無い。少しでも関係のありそうなことを挙げておく。食事に海で獲つたばかりの魚、城の一番奥に黄金と漆の模様の豪華な部屋、巡回見世物（絵と二人の芸人の歌と話）といったもの。

山下 グリフィスの日本昔話

次に話の筋に沿つて概略を記す。

「お後の病気回復に龍宮中が白い顔の道化になつて祝うことになる。太鼓、笛、バンジュー、琴、鼓、踊り子。猿や亀やくらげのことは誰も言わない。骨なしくらげに聞こえるだろうコーラス、「くらげの皮は海に流れ／くらげは海に沈む」は「国の川は海に流れて／雨は海に沈む」の替え歌（駄洒落）である。お後の注意を惹かない。鱈人魚。見物人のお后。ピンク色の部屋。床のマットは細長い貝の真珠層織りに一寸の珊瑚の縁。珍しいピンクの貝の花模様の天井。壁は同じ材料で海、宝石と亀甲模様。床の間に美しい色合いの海藻。奥の私室には水晶の糸で織つた髪飾りのような宝、珊瑚の化粧箱と書き物入れ。なかで一番の宝は巻物でそれには竜宮の宮殿、即位の部屋、女王の行列、告別の勇氣ある弓の引き手を案内した要人が描かれている。

珊瑚の森、水晶の岩屋を通つて音楽が聞こえてくる。イカ卿の館から来る音とわかつて好奇心がわく。この時間に一人で行くと威信に関わる。女心が好奇心に負けた。音楽会が

庭なら岩の上で見られる。滑稽な光景に息切れて涙が出るほど笑い転げた。叫びたいのを袖で口を押さえて息が止るほどであった。イカ卿は高さ六フィートの頭を逆立ちして前かがみになつて楽譜を読む。明かりの蠟燭が海老の触覚に落ちないように刺さっている。六本の腕がギターと鼓と太鼓の撥を取つて演奏。老いばれイカが六本の腕を動かし青いどんぐり目は音符をにらみ象に似た口が猿の肝やくらげの殻を駄洒落た歌でどなつていた。ステージを蠟燭が照らす。何よりこつけないのは聴衆が演奏者である。鯛は鰓を開け鱈（ひれ）で調子をとり高く低くのを鳴らす。グジェオンはなさないことに高音符の声をからす。アルトを歌う細身が自慢のガーは最近はやりだがたたんだ扇を鱈でもつていく。ベースを歌いどんぐり目の、太った蛙が口の孔を開いて指を上下して合唱を指揮する。立派な風姿の鱈は猿の肝取り事件に憤慨し仲間入りせず。河豚が飲料水運びの娘に丁寧に目配したのは歌う練習でのが渴いていた。虚栄心が強くて漁師の釣り針の周りで美しいが有毒な媚びる女を演じた。あんな自墮

落で有毒な女を釣る男の気が知れぬと。

鯛の後ろの鱗(えい)が片目をイカ卿に片目を飲料水に向けた。本当のことを言うとオーケストラの土気が沸いたお茶と食べ物の匂いに土気をくじかれた。スッポンは歌い続けたがイカ卿から顔を逸らせ背中をぶしつけに聖歌隊長に向けた。コバンザメは質素だが脂肪太り、コーラスに入ってウエイターの運ぶお茶に気づかないふりをする。そして亀がケーキとワインを欲しがるのは気障だと思つた。

長かったコンサートの後、のどの渴きに酒と食べ物の用意。音楽が止む。イカは逆立ちして6本の足を旋回して仲間を喜ばす。鯖はこれを見て品がない、お后が見られたらどうおっしゃるだろうという、お后に見られているのも知らずに。海老が蠟燭の消え残りを食べて触角を拭くとパーティに加わる。飲み物は酒、お茶、チェリー水。食べ物は雷ケーキ、卵入ビスケット、ご飯、大根、うどん、蓮根、タロ芋。付き出しは蠅、みみず、南京虫、小魚(次のテーブルで食べることになっていゝる)の餌。イカ卿の召使のだすお茶。河童が

いた。猿と亀の中間の動物で黄色い目、猿の手、短く刈り込んだ頭の毛、蛙の目、耳から耳に伸びる口、お目出度い河童、猿に似ているがその肝は葉にはならない。

お后は宴たけなわに笑いこけながら宮殿に帰るや寝てしまった。ご飯の桶から腕の吸盤を全部出して、鯖嬢がついにイカは大飯くらと決めてかかるまで勝手に食って酒を一気に飲んで家に帰ると丸まって寝てしまった。翌朝の「二日酔い」。

四

Lord Cuttle-Fish Gives a Concert を読みながらその道中の描写を記述していくうちに上記の訳文まじりの殺風景な文章になった。特別な人の祝いの歓迎振りが音楽演奏と食事の会でこまかく滑稽に表現されて終わるのであるが、くらのげの気の毒な失態も今は笑いのうちに歌いとはす陽気な馬鹿騒ぎのうちにペシミストのミス鯖をのぞいて龍宮は平静に戻っていく。昔話②になると Lord Cuttle-Fish's Concert のように題名が変わり終りのところでお后に音楽会と祝宴がなによりも葉になった。

笑いは葉と読者に思わせる。

東京時代にグリフィスは工部大学の電気学教授エアトン (William Edward Ayton 1847-1908) 夫妻を知り、とりわけ姉のマギーはその妻 Mrs. Matilda Chaplin Ayton と東京の名所を訪ねていた。一八七九年に英国に帰ってから作ったのが Child-Life in Japan and Japanese Child Stories (1901) である。この著書の「序文」でグリフィスは昔の日本がそのまま描かれていて江戸湾や富士山の見えるところで日本の子供に囲まれて住んでいたあのよき時代がしのばれると書く。

ラフカディオ・ハーン(小泉八雲 1850-1904) に Yuki-Onna や Snow a story of strange thing があり、グリフィスには贈られた黄金の漆 (The Gift of Gold Lacquer) とどう a fairy tale がある。この場合 a strange story と a fairy tale は話を読めば違はないと思われる。黄金の漆の話が一九〇八年の②に始めて現れるのには一九〇四年の Kwaidan の影響があったと考えたい。その話とは「ある晩、農夫の夢に美しい白鶴が現われて一本の木からとった白い液が光沢のある黒い漆になるといゝる」。

白鶴はその木の妖精であった。やがて農夫の息子は漆の修行のため奈良へ行つて有名な仏具職人になった。故郷の村に帰ると荒れた寺を金箔と漆で装飾を終えると大勢の村人が集まってきてにぎわった」。この一編には Yukio Onna の透明な文体と白のイメージの重なりがあった。ハーンの話は瑣事に過ぎないが「純粋で粘り強く文学性がある」(グリフィス)。これに対してグリフィスの話は社会性があり夢の告げが寺の復興につながる繁栄のイメージを作る。陽の光を受けて飛ぶ鶴は日清・日露と続く苦難の前途に立ち向かう強い意志の高揚を願う。

蛇足になるが禁断を破った男の話が Fairy tales に多い特徴の一つである。Yukio Onna の話によると、「雪嵐の夜に妖精(若い美しい女)と人間の若者の出会いのことは口にしていないと女に誓を立てる。妖精が雪の白さの美女になって現われ男はその虜になり結婚する。しかし男はその誓いを破ったために女に逃げられた」。こういう約束を守らない話としては西洋にも日本にも何か共通性があるところからハーンのもの a story of strange thing は西

洋的な話といつてよく、話の対象は異国的でもそこには人間性として通じる普遍的なものがあることを認めたい。

これまで論述してきたことを振り返つてみると、グリフィスが著わした Japanese Fairy World の特色については Japanese fairy tales を一つには日本昔話の原型に基づくもの、一つには全く著者の創造的発想の産物から成り立っているもの、いずれも昔を今に生かし読むものに歴史感覚を目覚めさせ工夫を努めている。その今というのはグリフィスが越前国福井と東京、横浜、国内の旅で知った江戸から明治の切り替え時期のことで、その実体験が強烈な印象として残つていておそらくその事情を知らせるのに最も可能で適切な方法に fairy tales 昔話を選んだと考えられる。

この著書の出版前に folklore の一種とみる立場から英国人の外交官ミットフォードと英国人ビジネスマンのファウンダの日本昔話を含む著書が出ている事は述べた。これらが原作のテクストに即した中味になっているのに比べて、米国人グリフィスは彼らの伝統的翻訳の殻を破つて自由に面白くしかも改訂を加

えて中味を展開させた。英国人にとつて独立百年の若い国の気鋭の浩瀚で面白い日本昔話の本を驚きと羨望の目で眺めたに違いない。

しかし昔話 = fairy tales に特有の約束事、例えば寓話的生き物で白竜、熊、猿、昆虫、魚などの creatures、話の主題になる破約、復讐、嘘、孝行、出世などの種類が国を問わずほとんどの国に見られる話の要素である以上は、いろんな国にその事情による話が期待される。グリフィスがそれに気付いて朝鮮、スイス、オランダ、ベルギー、ウェールズも国の誇るべき歴史のなかに上記の生物や主題を素材に時には面白く愉快に、時には大げさにアイロニーや諧謔を交えて、そしてなにより美しく文章化した物語を創作した。その当時グリフィスの Japanese fairy tales (日本昔話) が欧米の国々でもっとも多く読まれたという。うべうべし。うべうべし。

参考書目

- 1 『グリフィスと福井』山下英一 1979 福井県郷土誌懇談会
- 2 William Elliot Griffits, The Fukui Letters 1871.3.9-

若越郷土研究 五十二卷二号

1872.1.22. 2007 山下英一編

- 3 'Early Translations of Japanese Fairy-Tales and Children's Literature' Ann King Herring 1988
- 4 「グリフィスの福井民話」(『若越郷土研究』51の1) 6～17頁 2006) 山下英一 福井県郷土誌懇談会
- 5 「松村武雄訳の『和蘭童話集』」(『英学史研究』第35号 94～95頁 2002) 山下英一 日本英学史学会
- 6 「C. Pfoundes's The Mikado's Empire 批評」(『英学史研究』第37号 84～85頁 2004) 山下英一 日本英学史学会
- 7 「グリフィスのスイス物語」(『北陸英学史研究』第9輯 1～10頁 2004) 山下英一 日本英学史学会北陸支部